

大阪湾の自然再生をめざすネットワーク活動の方向性を考える —シンポジウム趣旨—

大阪市立自然史博物館 山西良平

On the network activities aiming to reclaim the natural environment of Osaka Bay -View and summary of the symposium-. Ryohei Yamanishi (*Osaka Museum of Natural History*)

本シンポジウムは関西自然保護機構主催の「かんさい自然フェスタ2008」におけるテーマ別シンポジウムのひとつとして企画されたものである。

大阪湾には「汚れた海」というイメージが付きまとい、市民から顧みられることが少ない場所のように思われているが、実際には沿岸各地でさまざまな団体が、大阪湾の自然再生に関わる調査研究、啓発、体験学習、美化等の取り組みを地道に続けている。

近年、特に「大阪湾再生行動計画」が策定された平成16年以降は、このような団体が相互に交流するさまざまな催しが実施されるようになった。4年間にわたって「大阪湾フォーラム」を開催してきた大阪湾見守りネットの活動や大阪湾環境再生連絡会が実行委員会を組織して2008年6月に400名以上が参加して実施した「大阪湾生き物一斉調査」などがその顕著な例である。また特筆すべきこととして、これらは行政機関との連携を原動力として推進されてきた。このような、ある面においては全国的にも先進的なネットワーク活動とそれを支える行政機関との連携が今後も発展し、その成果が各団体の活動に還元されるようにすることを期待して、団体やネットワーク組織の枠を超えたフランクな交流の場としてこのセッションを設けた。

神戸港湾空港技術調査事務所長の平澤充成氏と大阪府港湾局事業管理部長の大井初博氏には公務ご多忙のところにもかかわらず、行政機関の立場からそれぞれの具体的な取り組みとその奥の考え方を披歴していただいた。大阪湾見守りネット代表の田中正視氏には大阪湾の自然再生にとって国・地方の行政と連携した市民ネットワーク活動が不可欠であることを体験的に語っていただいた。大阪市立大学大学院工学研究科の矢持進教授は、先行している大阪湾水質一斉調査の取り組みの経過と教訓を示されるとともに、研究者も含めた「大阪湾環境再生推進プラットフォーム」の設立をご提案された。総合科学(株)海域環境部長の中西敬氏には、大阪湾見守りネットのユニークな活動を運動論的に分析し、その「先進性」を浮き彫りにしていただいた。山西はこのような市民ネットワーク活動において地元のミュージアム施設が果たしている役割について補足した。

本シンポジウムの記事は、録音された講演内容をもとに関西自然保護機構事務局が原稿を作成し、それぞれの演者によって加筆・修正を施していただいたものである。また、総合討論において有益なコメントを賜った大阪府立大学大学院生命環境科学研究科の上甫木昭春教授の発言内容も、ご本人の了解を得て掲載させていただいた。

10年間の大阪湾再生行動計画が折り返し点を迎えた今日、このシンポジウムが、これまでの活動を振り返り、大阪湾の自然再生にむけての持続的な取り組みの方向性を見出し、それを共有する画期となれば幸いである。

日時：2008年11月15日（土）

午前10時～12時

会場：大阪市立自然史博物館 講堂

出席者：83名